

長島誠一『エコロジカル・マルクス経済学』桜井書店、2010  
経済理論学会編『季刊 経済理論』第47巻第4号、2011.1

## 1 はじめに——本書の問いと主題——

グローバル化した資本蓄積は、その矛盾を地球環境危機と21世紀型経済危機（世界金融危機と世界同時不況）として発現させながら展開し、アメリカをはじめとする各国の政府や産業界は、深刻化する経済危機を環境危機打開策としての「グリーン・ニューディール」によって解決しようとしている。本書は、そのような21世紀初頭の現時点において、「環境破壊と貧困は資本主義システムの内部で解決可能なのか、それとも資本主義を超えた新しい経済社会システムに向かうべきなのか」という問いを提起し、エコロジー視点から唯物史観を再構築することによってこの問いに答えようとした、意欲的な試みである。著者は、上記の問いにたいする本書の解答として、「環境破壊と21世紀型恐慌を解決するためには社会主義的計画化の方向に向かわざるをえない」という結論を引き出し、この21世紀型の社会主義を「エコロジカル社会主義」と呼んでいる。したがって、本書の主題は、マルクス、エンゲルスの作業仮説としての唯物史観から現代の環境危機に光を当てつつ、彼らが意識的に組み込むことをしなかったエコロジーを基底にして唯物史観を豊富化し、エコロジカル社会主義を「自然と人間と社会と思想の相互関係と全体構図」（唯物史観）のなかに位置づけることである。

本書は大きな問いを追求し、そのために大きな主題を展開しようとしているので、多くの質問や疑問——・著者の提唱する新しい社会主義とは何か、・エコロジー視点を取り入れれば新しい社会主義なのか、・1920年代の社会主義経済計算論争をどのように評価しているのか、・社会主義においても残る市場経済の存続と利用という問題は、環境価値や環境影響評価を内包する環境経済にとってとくに重要ではないか、・ピグーの厚生経済学やカップの社会的費用論を始原とする環境経済学の展開と蓄積を、オコーナーのエコロジカル・マルクス主義論と宮本憲一の環境経済学に集約するかたちで継承していいのか、・『資本論』をベースに資本主義を語るのには「原理論における19世紀の特権化ではないか」、・制度派経済学が提起する資本主義の多様性視点が欠落しているのではないか、等々——が直ちに寄せられることが予想されるが、著者はそのような疑問・質問を十分に予測して本書の主題を展開していると思われる。

本書の大胆な試みを他の社会主義論や環境危機分析から区別する特徴は、評者のみるところ、①資本蓄積の視角から経済危機と環境危機を一体のものとして分析しうる枠組みを提供していること、②21世紀の新しい社会主義をエコロジカル社会主義と定義し、グローバル化した現代資本主義の矛盾を解決しうる新しい方向性をシンプルかつ力強く提唱していること、③使用価値視点、とりわけ人間労働と土壌（自然）の文化的・社会的意味を重視する視点から唯物史観の現代的意味を捉えなおし、刷新された唯物史観理解のなかに環境

危機とその解決形態としてのエコロジカル社会主義を位置づけていること、にある。著者がオコーナーの『自然の原因——エコロジカル・マルクス主義論集』(James O'Connor, Natural Causes. Essays in Ecological Marxism, The Guilford Press, 1998)を継承して新しい社会主義を展開しているので、オコーナー＝ナガシマ命題の展開として本書を理解することも可能である。次に本書の構成と内容をみることにしよう。

## 2 本書の構成と内容

本書は、環境危機と経済危機を現代のグローバル化した資本蓄積の危機として把握する点で著者と現代認識を共有する、オコーナーのエコロジカル社会主義論のエッセンスを紹介・検討しながら、「交換価値から使用価値へ」といったエコロジカル・マルクスの諸問題を考察する。そして、著者の構想する唯物史観（経済社会システム論）のなかにこれらの諸問題を位置づけ再構成する形で展開される。

本書の構成と内容は以下のとおりである。

はじめに

序章 エコロジーと唯物史観

第1章 マルクス経済学の課題

第2章 自然と人間——唯物史観と生態史観——

第3章 資本主義と生産条件——体制による素材の包摂——

第4章 資本蓄積の矛盾と環境危機

第5章 エコロジカル社会主義の理論

第6章 エコロジカル社会主義の運動

第7章 社会主義への多様な道

補論1 成長の臨界点の可能性——GPI（真の進歩指標）分析を中心にして——

補論2 さまざまな社会主義論

序章ではまず、地球温暖化などの世界的環境危機や核汚染の危機を抱える現代の危機にあっては、人類の生命と存続が階級概念よりも上位にある、という著者の認識が示される。そして、この認識にもとづき、エコロジーを基底において唯物史観を創造的に発展させる課題の緊急性が提起される。かつて高島善哉が提唱した生産力と生産関係とイデオロギーの立体的関係の構想を継承しつつ、著者は、労働過程・労働関係・生産関係の全体における労働疎外の克服と生産力概念の拡充（自然と文化を融合するものとしての人間労働）を、新たな21世紀の社会主義（エコロジカル社会主義）のビジョンの中心的要素として位置づける。

第1章で著者は、固有のエコロジー論が不在だとしばしば批判されるマルクス、エンゲルスには、人間と自然との物質代謝過程論や資本主義による労働力と土壌の破壊の分析に

みられるように、使用価値の側面から環境問題を考察する独自の視点があることを強調する。そのうえで、19世紀には予想できなかった現代の環境危機に対応するには、とりわけ「生産諸条件たる土壌と労働」の生産と再生産という彼らが残した問題（この問題には、使用価値の制約に立脚する「資本の過少生産」、労働力商品の価値を規定する消費財バスケットの変化、使用価値をめぐる闘争、等々が含まれている）についての研究を発展させる必要がある、ということがマルクス経済学の課題として提起される。

第2章では、「自然の搾取」に関心をもつエコロジストと資本による労働の搾取に関心を向けてきたマルクス主義者との対話の必要性を念頭におきながら、生産力と生産関係に関するマルクス主義の標準的理解には「文化や自然の特殊形態」についての歴史的研究が欠落していたことが反省される。そして、「労働は自然と文化を融合する」という視点から、資本主義のもとでの協業・分業・機械制大工業の発達の研究（『資本論』第1部）が再検討され、生産力も生産関係もともに自然性と文化性を帯びていることが明らかにされる。この章の意図は、一言で言えば、文化が協業過程（労働過程と労働関係）に織り込まれていることを指摘して、生産力が究極的に生産関係を規定するという生産力主導説を訂正することにある。

第3章では、資本主義経済が環境や科学技術を含む広義の生産条件をどのように開発し破壊してきたかが、労働力と土地の疲弊にたいするマルクスの告発の紹介を交えて説明される。著者は、マルクスは「労働力と土地という生産要素そのものの立ち入った分析はしなかった」と認識するオコーナーの提起した3つの生産条件、①労働力（生産の個人的条件）、②土地（自然条件）、③インフラストラクチャーと空間（運輸とコミュニケーションを含む社会的生産の共同的・一般的条件）を紹介する。そして、生産力と生産関係の双方に関わるこれらの生産条件を資本にとって望ましい質と量で確保するには、教育・福祉政策や土地政策や都市政策（広義の環境政策）といった国家介入が必要である、と分析するが、この点は第3章のポイントであろう。

第4章では、資本蓄積・恐慌と環境危機が相互規定的関係にあることを、恐慌の2つの機能、すなわち、矛盾の爆発による資本蓄積・循環の中断と不況期を通しての資本蓄積の再建ということに関連させて分析する。その枠組みのなかで著者は、オコーナーのエコロジカル社会主義が、伝統的マルクス主義のように生産力と生産関係の矛盾ではなく、「資本制生産（生産関係・生産力の両方を含む）と資本制的生産条件との矛盾」を重視すること、および、オコーナーによる恐慌と環境危機の一体的把握——オコーナーは、円滑な資本蓄積を保障する2つの条件のうちで、剰余価値の生産条件（搾取の条件）の悪化を環境危機という「資本主義の第二の矛盾」として、剰余価値の実現条件の悪化を過剰生産という「資本主義の第一の矛盾」として規定する——について、理論的に説明する。

第5章では、社会主義とエコロジーとフェミニズムの協力を提唱するオコーナーのエコロジカル社会主義の理論的基礎とその可能性が説明される。それは、3つの生産条件、すなわち、環境、労働力、都市のインフラストラクチャー（空間）の相互関係を理論化する

ことによって、これまで別々に展開されてきた社会運動（エコロジー派、フェミニズム、都市運動）をひとつの新しい社会運動として理論化する可能性を作り出している。新しい社会運動の理論的基礎は、資本によって生産・再生産されない3つの生産条件を擬制商品として利用することによる制約から、資本自身による生産条件の破壊や恐慌を通しての生産条件の変化（および生産条件の変化を求める新しい社会運動）が生まれることに求められている。この章はさらに、「維持可能な資本主義は可能か」という問いを提起し、「維持可能な資本主義」という概念のあいまい性を批判するとともに、オコーナーの論述を紹介しながら維持可能な社会の可能性を展望している。

第6章では、まず、オコーナーの議論とコヴェル『エコ社会主義とは何か』（戸田清訳、緑風出版、2009）にもとづいて、アメリカ合衆国における5つのエコロジー運動——エコロジカル無政府主義、エコロジカル社会主義、多文化主義とエコロジカル正義運動、ディープ・エコロジー、エコロジカル・フェミニズム——が紹介される。ついで、日本における環境保護運動の歴史が、主として宮本憲一『環境経済学（新版）』（岩波書店、2007）に従って説明され、最後に、資本主義のグローバル化に対抗して国際エコロジカル社会主義を構想するオコーナーの所説の要点が、簡潔に展開される。

第7章では、オコーナーによる伝統的社会主義とエコロジカル社会主義との比較が、生産条件（搾取の条件）と実現の条件を統一しなければならないという立場をとる著者のコメントを加えて紹介される。そして、労働力・自然・コミュニティの生産と再生産がますます社会化されている現代では、経済的・エコロジー的・共同的債務を便益と負担の平等化によって解決しようとする分配的正義は実行不可能である、という認識が示され、個人の権利に関わる分配的正義から生産的正義への転換が、最重要の課題として提起される。

### 3 論点と若干のコメント

本書は、恐慌論研究の第一人者である著者が、エコロジーを意識的に基底において構想する唯物史観のなかに、オコーナーが『自然の原因——エコロジカル・マルクス主義論集』で展開したエコロジカル社会主義論の主要命題を位置づけることによって、21世紀初頭の経済的・環境的危機に根本的な説明と解決の指針をあたえうるマルクス経済学の構築をめざしたものであり、経済学原理論の研究者の手による、最初の本格的なマルクスのエコロジー論であると言ってよいだろう。以下、オコーナー自身による説明不足の論点や、著者が多数のコメントを付しているオコーナーへの批判点、エコロジカル社会主義は現在の規範的な批判原理なのか、それとも将来の社会状態なのか、といった点について、評者の感想をのべることにしたい。

第1に、分配的正義と生産的正義の区別は、社会民主主義とエコロジカル社会主義、あるいは体制内的エコロジー論（佐和隆光『グリーン資本主義』岩波新書もここに分類される）とエコロジカル社会主義との分水嶺とされている。しかし、生産的正義の定義は、本書においてもオコーナーの論文集においても明確ではない。便益と負担（あるいは汚染と

費用負担)の公平な配分という、分配的正義を超える生産的正义とは何なのか。それは、著者が補論1で説明している GPI (真の進歩指標) のことなのだろうか。

第2に、唯物史観のなかにエコロジカル社会主義を位置づけることは、資本主義のもとでの現在の環境危機を解決する将来の社会状態として、エコロジカル社会主義を設定することにつながらないだろうか。評者には、エコロジカル社会主義を提唱することは、地球環境への自分たちの権利を自分自身で主張できない絶対的弱者としての将来世代および途上国の貧困層にたいする現在世代の責任(ヨナス『責任という原理』加藤尚武監訳、東信堂、2000)を問うものであり、社会主義が本来もっている、現在の危機への批判とそのオルタナティブを提起する規範的・倫理的な原理を再提起することである、と思われるが、どうであろうか。

第3に、著者は、資本過剰(恐慌)と環境危機につながる生産条件を区別し並行的に論じているオコーナーの議論を批判し、マルクスに従って両者を統一的に把握しようとしている。しかしそれは、オコーナーが、自然、人間、都市・空間・コミュニティの擬制商品化というポランニー的視点からの環境危機論をマルクスの経済危機論に接合することで、いわば「ポランニー主義的マルクス主義」(リピエッツ「政治的エコロジーとマルクス主義」、『レギュレーションの社会理論』青木書店、2002、参照)を構築しようとしていることに含まれるメリット——例えば、資本主義の諸矛盾(資本・労働関係、資本・自然関係、両性間関係、資本・空間関係、等々)にたいするさまざまな自律的運動を、エコロジカル・マルクス主義のもとで対等に位置づけるという課題——を無視することにならないだろうか。

いずれにせよ、環境危機と経済危機がグローバルなレベルで結合している21世紀型危機を分析する枠組みにおいても、またエコロジー視点を基底とする新しい経済社会システムの構想においても、本書が斬新なアイデアを提供していることは間違いないだろう。本書の公刊を機に、地球環境危機とマルクス経済学の課題について、あるいはエコロジーと社会主義の関連について、活発な議論が展開されることが望まれる。